

読み札	絵札	解説
<p>沼田の台地 河岸段丘</p>		<p>赤城山<small>あかぎ</small>が生まれると沼田は盆地<small>ぼんち</small>となり、やがて湖<small>う</small>になった。長い年月<small>せんじょうち</small>の間に湖が埋まり、その上に扇状地<small>せんじょうち</small>が作られ、川は侵食<small>しんしょく</small>と堆積<small>たいせき</small>を繰り返しながら、何段もの段丘<small>だんきゅう</small>を刻み出したと考えられる。こうして片品川<small>かたしな</small>、利根川<small>とね</small>、薄根川<small>うすね</small>によって刻まれたのが沼田台地である。従<small>したが</small>って沼田は三方崖<small>がけ</small>となり、利根川は沼田台地より約90m下を流れている。</p>
<p>市の花市の木 桔梗と桜は</p>		<p>沼田市は、市制施行25周年記念事業として「市の木」「市の花」を一般公募し、昭和54年(1979)10月1日に「さくら」と「ききょう」が制定された。選定理由は、「さくら」は城下町<small>じょうかまち</small>としての名残<small>なごり</small>であり沼田の象徴<small>しょうちよう</small>、沼田城址<small>じょうし</small>の桜<small>さくら</small>は市民の歴史という理由で、「ききょう」は元沼田城主である土岐家の家紋<small>とぎ かもん</small>、清楚で格調高く高原都市<small>かくちよう</small>の象徴として市民に馴染み深いという理由だった。</p>
<p>沼田公園 久米民之助の生みの親</p>		<p>久米民之助<small>くめたみのすけ</small>は文久元年(1861)沼田に生まれ、15歳で上京、工部大学<small>ぶんきゆう</small>校(現東京大学)を卒業した。宮内省<small>さい</small>に入り皇居二重橋の造営<small>くなくいしやう</small>にたずさわり、実業家<small>こうきよ</small>で成功を収め、その後政界に進んで衆議院議員<small>ぞうえい</small>に4期当選した。当時荒地<small>おさ</small>だった沼田城址整備のために私財を投じ、大正15年(1926)町に寄付した。当時は久米公園といわれ、これが現在の沼田公園である。昭和6年(1931)71歳で亡くなり、墓は鍛冶町<small>げんざい</small>正覚寺にある。平成元年(1989)沼田市名誉市民<small>なめいよ</small>に顕彰された。</p>
<p>大蛇まつりの 老神温泉</p>		<p>物語では、赤城山の神<small>あかぎ</small>(大蛇<small>だいじゃ</small>)と日光男体山の神<small>なんたいさん</small>(ムカデ)が戦場ヶ原<small>せんじやうがはら</small>で戦った。矢で射られた赤城山の神がこの地に戻り、その矢を抜き大地に突き刺すとたちまち湯が湧き出し、その湯に浸かるとすぐに傷が治り、男体山の神を追い返した。それが、老神温泉<small>おいがみおんせん</small>の由来と伝えられている。毎年5月上旬<small>じやうじゆん</small>、「大蛇まつり」を開催し、巨大な蛇神輿<small>へびみこし</small>が温泉街<small>おんせんがいの</small>を練り歩く。四季の自然美を堪能できるが、特に紅葉<small>こうよう</small>の溪谷<small>けいこく</small>は絶景である。</p>
<p>宮川ひろの 子どもらに 物語</p>		<p>宮川ひろ<small>みやかわ</small>は児童文学作家。大正12年(1923)、東村千鳥<small>あずま ちどり</small>(現利根町千鳥)に生まれた。東村尋常高等小学校平川分教場などの教員を勤めたのち上京。昭和44年(1969)、「るすばん先生」でデビュー。昭和53年(1978)、「夜のかげぼうし」で第8回赤い鳥文学賞を受賞。その後も発表した作品で数々の賞を受賞した。この他著書<small>ちよしよ</small>に利根沼田を舞台とした「春駒のうた」などがある。平成30年(2018)95歳で亡くなった。</p>